

〈書評と紹介〉ジェームズ・C.スコット著 佐藤仁監訳『ゾミア：脱国家の世界史』

SHIBUYA, Junichi / 渋谷, 淳一

(出版者 / Publisher)

法政大学大原社会問題研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

The Journal of Ohara Institute for Social Research / 大原社会問題研究所雑誌

(巻 / Volume)

689

(開始ページ / Start Page)

73

(終了ページ / End Page)

76

(発行年 / Year)

2016-03-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00013092>

ジェームズ・C. スコット著
佐藤仁監訳

『ゾミア——脱国家の世界史』

評者：渋谷 淳一

ゾミアからの世界史

本書はジェームズ・C. スコット（イエール大学）により2007年に発表された約470ページに及ぶ大著であり、原題は*The Art of Not Being Governed: An Anarchist History of Upland Southeast Asia*である。佐藤仁氏を中心に翻訳がなされ2012年に刊行されたものであり、後述するようにあらゆる多様性を含むゾミアを対象としながらも、随時世界史的な視点と事象の間を行き来する本書を、専門家以外が読むことが可能な形で邦訳がなされており、大変幸福なことであると思う。

ゾミアとは現在の東南アジアの大陸部および中国・インド・バングラディシュとの国境地域を含めた領域における山岳地域およびそこに住む人々を意味する。チベット・ビルマ系言語において、外を意味する「ゾ」と人々を意味する「ミア」から成る言葉である。このゾミアから世界史を再検討することが目的である。

世界史におけるゾミアの人々、あるいは山岳地帯の少数民族は、未開、野蛮、生など、文明化・近代化により進歩した「われわれ」とは別の存在、原初的な存在としてイメージされ、加えてわれわれの下位の存在として序列化される。世界史は「われわれ」の進歩、すなわち国家の

建設と発展を中心に据え描くことに執心してきた。その鏡として倒置されるのが、ゾミアを含む、少数民族、部族といった人々である。彼らは国家の周辺や遠く離れた辺境に暮らす発展に取り残された人々として認識されてきた。しかしながら、国家とは盤石の安定を持つ社会集団だったのかと言われれば、全くそうではない。世界史という国家の興亡史の中で、無数の国家が生まれ消えていくのは全く珍しいことではない。国家が不可避免的に迎える停滞期や衰退期において、徐々に中央の支配から離脱する諸藩国や諸部族、あるいは国家の形成に抵抗し逃走した集団といった人々を想定したとき、ゾミアがそうした人々の受け皿となることは十分に説得力を持つ。そうした事実は世界史において散見され、ゾミアの口承や文化や社会構造の中に息づいているものである。こうした視点に立つと、彼らの秩序や習慣や文化といった特徴は原題が意味するような「統治されない技術」として立ち現れ、戦略的な選択として理解される。よって著者は、前述した文明と野蛮、熟と生、近代と原始などの世界史の二項モデルによる文明史観の論理は根本的にひっくりかえされねばならないと、本書の趣旨をまとめている。

本書の構成と概要

本書の構成は以下のとおりである。

はじめに

- I：山地、盆地、国家——ゾミア序論
- II：国家空間——統治と収奪の領域
- III：労働力と穀物の集積——農奴と灌漑稲作
- IV：文明とならず者
- V：国家との距離をとる——山地に移り住む
- VI：国家をかわし、国家を阻む——逃避の文化と農業
- VI+1/2：口承、筆記、文書
- VII：民族創造——ラディカルな構築主義的見解

VIII：再生の預言者たち

IX：結論

以下では、各章の内容を紹介していく。

「I：山地、盆地、国家——ゾミア序論」：導入部にあたる本章は、ゾミアが低地に展開された国家への抵抗の地、国家からの避難地帯として機能してきたことを描く。そして、国家の中央から地形的にアクセスが困難であり、言語や文化が多様な構成を持つという「破片地帯」としてのゾミアの性格は、国家から距離を取るという意図的な選択の結果であり、自立性のための選択であるという本書の主張が展開される。そして、国家中心主義的な世界史は空白がいくつも存在し、そこにはゾミアのような周辺に生きる人々の歴史や、国家によらない、無秩序状態の歴史があったとして、アナーキズム史観を提示する。

「II：国家空間——統治と収奪の領域」：II～IVにおいては近代以前の国家の根本的な限界を指摘している。東南アジアでは、水稻を基盤にした国家が形成され、その幾つかが繁栄を誇った。しかし、近代以前の国家が実効的に支配できる領域は、おおそ平野部の半径300キロメートル程度であり、それを超える領域に支配が及んだとしても、標高や雨季の悪路に阻まれ一過性のものだったとしている。この意味で世界史のほとんどを占める国家の統治は明確な限界を有しており、すなわちゾミアと国家は両立していたと考えることが必要であるとする。

「III：労働力と穀物の集積——農奴と灌漑稲作」：水稻国家が成立する一方で、農業を支えるのに不可欠な人口は、東南アジアにおいて比較的少なかった。土地の支配が人間を支配するのではなく、人間の支配こそが土地の支配を意味したことを踏まえ、水稻国家は血統や宗教にこだわらず、時にはアイデンティティさえも可

变的なものとすることで、どうにかして人々を集めることで国家を存立させてきた。このように水稻国家は臣民および周辺の人々の囲い込みに苦心する一方で、強制的に人々を集める奴隷制と奴隷狩りや、捕虜をもたらず戦争にも依存することとなった。しかしながら、このような人口に依存した水稻国家は、一度統治に緩みが生じると、それにとまなう権力による人々の抑制や過度な搾取により人々の逃亡・反乱が生じ、さらに締め付けを厳しくするという悪循環の中で、またたくまに自壊する脆弱なものであった。

「IV：文明とならず者」：文明論、すなわち文明と野蛮（文明人と野蛮人）という二項対立は今日まで根強く残っているが、この規定も疑わしいものだとしている。これは内に対する権力の正統性を説明するとともに、臣民を野蛮な周辺へと駆り立てないための技法であった。しかしながら実態としては、その国家経済およびその国際経済はゾミアからの商品、顕著な礼としては胡椒や香木などに依存し、国防においても周辺諸民族との結びつきは不可欠のものであった。このように国家は周辺に対する葛藤の中にあった。しかしながら、すでに述べてきたように国家から周辺への移住は不可避的なことであり、多くの人々が領域的な意味だけでなく文明から野蛮へ概念上の移動を繰り返してきた。すなわち、野蛮であることは、どのように国家と向き合うかという問題であり、それはやはり選択的なものである。

「V：国家との距離をとる——山地に移り住む」：本章以降で具体的にどうゾミアへの移住が行われ、どのような社会や文化を形成したかについて述べている。まず逃避の原因として、課税と賦役、戦争と反乱、略奪および奴隷売買を挙げ、そうした障害に対して自由になる自発的にゾミアへ向かう「自己野蛮化」のプロセスは、いくらでもあったことである。さらに、物

理的に国家と距離を取るだけでなく、社会も差異化していくプロセスも伴う。例えば焼畑農業や狩猟に従事するのは、単に山地に適応するだけでなく、平地社会とは別の社会を形成する意志であると著者は考える。また、アカの例を挙げ、その口承史（オーラル・ヒストリー）の中には、自らの国家化の失敗を歌い上げ教訓とすることで、国家から逃避と無国家性を維持することが規範として埋め込まれている。

「VI：国家をかわし、国家を阻む——逃避の文化と農業」：国家からの逃避を目的として自らの社会を形成した極端な例として、現在にまで残るカレンの逃避村を挙げている。すぐ逃避できるように、世帯数を制限し、農業も簡易にすぐ収穫できる作物を選択し、逃避焼畑、逃避作物と著者が呼ぶような移動性に沿う形態へと変化していった。それ以外のゾミアにおいても、彼らの選択する土地は国家の軍隊が入りづらい難所を選択し、さらなる逃避が可能な後背地をもつ場所が選ばれた。また、社会構造も強力な権力者の登場を防ぐイデオロギーを持ち、周辺の集団と国家に抵抗する力を持ち、さらに平等主義と無政府状態により国家の統治を著しく困難とする条件が揃っていた。このようにゾミアは国家にとって生産性が低く、コストが掛かる、統治の魅力のないものへと自らを変質させていったのである。

「VI+1/2：口承、筆記、文書」：ここでの筆者の主張は、ゾミアの多くが彼らの言葉を書き表す文字を持たないことは、これまでの戦略的選択と同じように、国家から距離を取るためのものだったのではないかというものである。すなわち、無文字ではなく、非識字という姿勢と、文章ではなく口承により自らを表現していくという選択である。これは大胆な仮説ではあるが、いくつかの情況証拠を挙げている。ひとつは、彼らの口承の中で、かつては文字を持っていた

が何らかの理由により喪失したというものである。この理由としては前近代においては数が限られた識字者は国家との親和性が高く、ゾミアの繰り返される移動の中で取り残された、あるいはそもそも国家から離れることで読み書きの必要性や習得の動機付けが薄まり徐々に失われたのではないかとしている。また、絶えず人を受け入れ、移動を繰り返すゾミアにとって、自らの歴史は文章により描かれた固定化したものよりも、状況に合わせて再解釈の「ゆらぎ」があることが都合よかったのである。この補章がおそらく最も議論になるだろうし、後続する研究のポイントとなっていくだろう。

「VII：民族創造——ラディカルな構築主義的見解」：ここまでゾミアの行動様式を中心に議論されてきたが、それでは各ゾミアを集団たらしめているアイデンティティとは何かという問題に取り組むのが本章である。ゾミアはすでに見てきたように様々な取捨選択の上で離合集散を繰り返してきたが、自らの部族の認識も同様であり、部族や民族は国家との関係を有利に進める集団的位置取り（ポジショニング）として政治的に設計されたものだというのが著者の主張であり、これをラディカルな構築主義としている。

「VIII：再生の預言者たち」：最終章では国家に対する反乱を取り上げる。反乱の原因は世俗的なものであったが、そのほとんどは預言者という宗教的なカリスマによって当初は率いられ、極めて宗教色の濃いものであった。低地と高地の反乱の違いに注目し、前者が国家と自らの集団との間の合意の枠内での抑圧や不公平への抵抗を表すのに対して、後者の場合は国家の侵食がこれまでの自立性を喪失させ、奴隷となることを強いられたり、逃避を余儀なくされたりといった深刻な選択肢に対する抵抗であった。高地における反乱はその意味で自らの抜本的な変

化を意味し、これまでの文化や習慣をかなぐり捨ててしまうこともしばしばであった。そうした場合には、これまでの信仰ではなく低地の世界宗教、仏教やキリスト教が導入され人々を反乱へ導くこととなった。その意味で預言者は低地の文化を熟知するものであり翻訳者であったといえる。いわば、ここでもゾミアは自らの生存のために敵となった国家の宗教さえ利用する大胆な戦略的な取捨選択を行ったといえるというのが著者の主張である。

本書の意義——ゾミアと現代東南アジア

本書は人類学、国家論に類する研究であり、そうした視点からの議論については、本書のはじめに書かれているように、著者の議論の実証性をどういった次元で求めていくかについて、論者により様々な立場があるだろう。特にゾミアに向かう、国家と距離を取るといったことを、主体的な戦略の選択であると言い切る事ができるかについては、本著をベースとした後続する研究成果を踏まえて議論すべき領域なのであるだろう。しかしながら、著者が言うところの情況証拠の積み重ねにより、論旨は明確で説得的である。

国際関係論、国際社会学を学ぶ評者としては特に以下の点に関心を持った。それは著者によれば技術の飛躍的進歩により距離の概念が変化した現代には、こうしたゾミアの議論は当てはまらないとしているが果たしてどうだろうか。

ここで扱われたゾミアが存在する国家領域は、今日それらをまとめてメコン地域と呼ばれ、

急速な経済発展を遂げつつある。しかしながら、冷戦や国内紛争によりメコン地域の交通網は、極めて脆弱な状態にあり、今日ようやく国と国とを結ぶ主要幹線道路が整備された段階である。さらには、新興地域として電力需要が見込まれることから、山間部にあたるゾミアの領域に大ダム建設計画は無数に展開されている。そういった意味では、国家はまさに今ゾミアに立ち入らんとしている。

逆に、域内の労働力が早くも不足することが危惧される中で、ゾミアからも水稻農業ではなく工場労働者として低地へ移民するケースが今後増えていくだろう。また、本書においても度々紹介されたが現代のミャンマーからタイ国境への大量の難民もまた、こうしたゾミアの文脈で捉える必要があるだろう。

たしかに、このような新しい局面は、王国・平地国家・水稻国家とゾミアの共生ではなく、現代の国民国家とゾミアの共生という意味で大きな違いがあるのであろう。だが、依然として文明史観の影響下にある「われわれ」にとって、まずは山岳地帯に住む人々をゾミアとして理解した上で、どう向き合うかという問題に取り組まなくてはならない。その意味で本書の果たす役割は極めて現代的である。

(ジェームズ・C. スコット著、佐藤仁監訳『ゾミア——脱国家の世界史』みすず書房、2013年10月、xix+363頁+lxvii、定価6,400円+税)
(しぶや・じゅんいち 法政大学大原社会問題研究所兼任研究員)